

マムルーク朝末期のシリア統治政策

——財政政策とシリアの支配層の

動向を中心に——

五十嵐 大介

はじめに

マムルーク朝 (648-922/1250-1517) は、スルタン・ナーシル al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn の治世第三期 (709-41/1310-41) において国家体制の完成を見、経済的・文化的にも繁栄を極めた。しかしその後、14世紀後半のスルタン位をめぐるマムルーク相互の内部抗争やペスト等の度重なる天災、さらにはティムールの侵攻などの外的圧力は、エジプト・シリアの政治経済に深刻な打撃を与えた。スルタン・バルクーク al-Zāhir Barqūq に始まる、いわゆるブルジー・マムルーク朝 (784-922/1382-1517) は、スルタン・バルスバーイ al-Ashraf Barsbāy の治世など、一時的な政治的・経済的修復は見られたものの、全体としては衰退の時代ととらえられている。特に15世紀後半以降、オスマン朝によって王朝が滅亡するまでの約半世紀は、従来単に「混乱期」と一括され、その政治的・社会的不安が強調されるのみであり、「混乱」の具体的な分析は行われてこなかったといえよう⁽¹⁾。

しかし近年、C. F. Petry がこの時代に関して、当時のマムルーク朝の政治的・経済的な諸問題と、それに対応する末期の有力スルタン、カーイトバーイ al-Ashraf Qāyṭbāy (在位873-901/1468-1495) とガウリー al-Ashraf Qānṣūh al-Ghawri (在位906-922/1501-1516) の二者の治世について注目した一連の研究を発表している。彼の研究は、前者を「伝統の擁護者」、後者を「改革者」として、その統治の在り方の違いを過度に強調していることなど、さらに検討を加えるべき問題を多々含んではいるものの、この時代が単なる混乱の

時代ではなく、スルタンの側からの能動的な国家体制の改革が試みられた時代であるととらえる点で、示唆に富んだ研究であるといえよう⁽²⁾。

さて、マムルーク朝の政権の中心はエジプトに置かれ、シリア地方は概ねダマスクス・アレppo・トリポリ・ハマー・サファド・ガザ・カラクの七つの州 (mamlaka) に分割され、その州の名を冠した州都を中心として統治されていた⁽³⁾。とりわけ首都カイロに次ぐ王国第二の都市であったダマスクスを対象とした研究には豊富な蓄積があり、15世紀後半以降の状況についてもいくつかの研究がなされている⁽⁴⁾。特に三浦徹の研究は、この時代のダマスクスにおいては都市社会に各種の変動が見られ、一部の有力者による私的な党派 (jamā'a) の形成や、ズール (zu'r) と呼ばれる都市の無頼集団の活動の活発化など、既存の都市社会構造に変化が生じていたことを指摘している⁽⁵⁾。

しかし、マムルーク朝期のシリアの研究を行う際に考慮しなければならないのは、当時のシリアがマムルーク朝の地方の州としてエジプトのスルタン政府の従属下にあったという歴史的事実である。ダマスクスをはじめとするシリアの政治的、社会的状況はエジプトから独立したのではなく、中央政府のシリア地方に対する支配の在り方と大きく関わりあっていた。すなわち、エジプトの統治体制とシリアの統治体制とは、有機的な関連をもつものとして考える必要があるのである。

このような視点のもと、本稿では、マムルーク朝の末期にあたる15世紀後半、特にスルタン・カーイトバーイの治世以降にマムルーク朝の国家体制の立て直しを試みる様々な改革が導入された事実注目し、そのような政策がシリア地方の統治体制にどのような影響を及ぼしたのか、史料の豊富なダマスクスを中心として検討する。

本稿で使用した史料とその略称は以下の通りである。

- ・ anon. *Ḥawliyyāt Dimashqiya*. Ḥasan Ḥabashī (ed.), al-Qāhira, 1968. [*Ḥawliyyāt*]
- ・ al-'Aynī, *'Iqd al-jumān fī tārikh ahl al-zamān*. 'Abd al-Rāziq

- al-Taṅṭāwī al-Qarmūṭ (ed.), al-Qāhira, 1989. [*Iqd*]
- ・ al-Buṣrawī, *Ta'riḫ al-Buṣrawī*. Akram Ḥasan al-'Ulabī (ed.), Dimashq and Bayrūt, 1988. [*Buṣrawī*]
 - ・ al-Ghāzzī, *al-Kawāḫib al-sā'ira bi-a'yān al-mi'a al-'āshira*. Jibrā'il Sulaymān Jabbūr (ed.), 3vols., Bayrūt, 1945-59, repr. Bayrūt, 1979. [*Kawāḫib*]
 - ・ Ibn al-'Imād al-Ḥanbalī, *Shadharāt al-dhahab fi akhbār man dhahaba*. 8 vols., Bayrūt, n.d. [*Shadharāt*]
 - ・ Ibn Iyās, *Badā'i' al-zuhūr fi waqā'i' al-duhūr*. Muḥammad Muṣṭafā (ed.), 5 vols., al-Qāhira, 1983-1984. [*Badā'i'*]
 - ・ Ibn Kathīr, *al-Bidāya wal-nihāya*. 14 vols., Bayrūt, 1966. [*Bidāya*]
 - ・ Ibn Qāḍī Shuhba, *Tārīḫ Ibn Qāḍī Shuhba*. Adnān Darwish (ed.), 3 vols., Dimashq, 1977-1994. [*Shuhba*]
 - ・ Ibn Ṣaṣrā, *al-Durra al-muḍī'a fi al-dawla al-zāhiriya*. W. Brinner (ed.), 2 vols., Berkeley, 1963. [*Durra*]
 - ・ Ibn al-Ṣayrafī, *Inbā' al-ḥaṣr bi-abnā' al-'aṣr*. Ḥasan Ḥabashī (ed.), al-Qāhira, 1970. [*Inbā'*]
 - ・ Ibn Taghribirdī, *al-Nujūm al-zāhira fi mulūk Miṣr wal-Qāhira*. Fahim Muḥammad Shaltūt et al. (ed.), 16 vols., al-Qāhira, 1963-1972. [*Nujūm*]
 - ・ Ibn Taghribirdī, *Ḥawādith al-duhūr fi madā al-ayyām wal-shuhūr*. W. Popper (ed.), 4 vols., Berkeley, 1930-42. [*Ḥawādith*]
 - ・ Ibn Ṭūlūn, *I'lām al-warā bi-man wulliya nā'iban min al-atrāk bi-Dimashq al-Shām al-Kubrā*. Muḥammad Aḥmad Dahmān (ed.). 2nd ed. Dimashq, 1984., French tr. by H. Laoust, *Les Gouverneurs de Damas sous les Mamlouks et les premiers Ottomans (658-1156/1260-1744)*. Damas, 1952. [*I'lām*]
 - ・ Ibn Ṭūlūn, *Mufūkaha al-khillān fi ḥawādith al-zamān*. Muḥammad Muṣṭafā (ed.), 2 vols., al-Qāhira, 1962-1964. [*Mufūkaha*]

- ・ Ibn Ṭūlūn, *Quḍāt Dimashq, al-thaḡhr al-bassām fi dhikr man wulliya qaḍā' al-Shām*. Ṣalāḥ al-Dīn al-Munajjid (ed.), Dimashq, 1956. [*Quḍāt*]
- ・ al-Maqrīzī, *Kitāb al-Sulūk li-ma'rifa duwal al-mulūk*, vols. 1-2, Muḥammad Muṣṭafā Ziyāda (ed.), al-Qāhira, 1939-58, vols. 3-4, Sa'id 'Abd al-Fattāḥ 'Āshūr (ed.), al-Qāhira, 1970-73. [*Sulūk*]
- ・ al-Maqrīzī, *Kitāb al-mawā'iz wal-i'tibār bi-dhikr al-Khiṭaṭ wal-āthār*. 2 vols., Būlāq, 1270 A.H.: repr. Baghdād, 1970. [*Khiṭaṭ*]
- ・ al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-a'shā fi ṣinā'a al-inshā'*, 14 vols., al-Qāhira, 1913-22. [*Ṣubḥ*]
- ・ al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-lāmi' li-ahl al-qarn al-tāsi'*. 12 vols., al-Qāhira, 1934-37. [*Ḍaw'*]
- ・ al-Zāhiri, *Kitāb Zubda kashf al-mamālik*. Paul Ravaisse (ed.), Paris, 1894. [*Zubda*]

I. 中央政府の改革とシリア

1. エジプトにおける中央政府の改革

8/14世紀後半からの政治的混乱と行政の悪化⁽⁶⁾、さらには748/1348年以降、中東地域を断続的に襲ったペストによる荒廃と人口の減少は⁽⁷⁾、エジプト・シリアにおける農業生産の低下と経済的衰退をもたらした。このような農業生産の減退は、マムルーク朝の国家体制の根本をゆるがす問題であった。すなわち、マムルーク朝国家の基本構造は、佐藤次高の言うように「マムルーク出身の軍人が国家の枢要部を占め、イクター保有を通じて農村と都市を支配する体制」であったが⁽⁸⁾、このような農業生産の減退は、地方の農村をイクターとして所持し、自身の収入基盤としていたマムルーク層に深刻な打撃を与えたのであった。それに加えて、スルタンやアミールたちは、自身とその子孫の財産を確保することなどを目的として、国家の土地や授与されたイクター地を頻繁にワクフに転換した。そ

のことは国家が所有する、イクターとして授与するための土地の減少を意味し、イクター制を基盤とした軍隊の弱体化につながったのである⁽⁹⁾。このような状況において、スルタン・バルクーク（在位784-91, 792-801/1382-9, 1390-9）による Diwān al-Mufrad の創設以後、それを補う手段として、マムルークやその他の軍隊への月給（jām akiya）をはじめとする各種の支給が、国家によって組織的に行われるようになり、時代が下るに従って国家財政の中で軍隊への俸給が占める割合が増加していったのである⁽¹⁰⁾。15世紀に入ると、俸給支払遅延によるマムルーク軍団の暴動が頻発したが、これらは三浦徹も指摘しているように、単なる規律の弛緩としてとらえるべきではなく、イクターという収入基盤を失ったマムルークが、国家からの俸給へ依存するようになった結果として生じた現象であり、イクター制に基づいたマムルーク体制が限界に近づいたことの現われとしてとらえるべきであろう⁽¹¹⁾。

さて、9/15世紀後半のこの時代、このような軍隊への俸給支払い額が格段に増加した。スルタン・シャイフ Mu'ayyad Shaykh 期（在位815-824/1412-21）にはスルタンのマムルーク軍団への支払総額は月に11,000ディーナールであったのが、カーイトバーイ即位当時の873/1468年には月46,000ディーナールにも膨れ上がり、国家財政を圧迫した⁽¹²⁾。その一方で、15世紀後半以降、外国勢力によるマムルーク朝への圧力が次第に強まり、ドゥルガドゥル君侯国、アク・コユル、オスマン帝国などとの度重なる戦争、国内のアラブ遊牧民反乱の鎮圧は、軍隊に通常の俸給支払いに加え、出征手当（nafaqa）を支給する国家に膨大な出費を強いたのであった⁽¹³⁾。

このような状況により、行き詰まった国家財政を立て直し、俸給支払を円滑に進めることによってマムルークと軍隊を維持することが国家にとっての最大の課題となり、特にスルタン・カーイトバーイ以降、財政上の様々な改革が断行された。それは俸給額の削減やワクフ、私有地への課税、商人やズインミーへの臨時課税などの新たな課税政策の導入の他、制度的な変革として、有力な武官職であるダワーダール（dawādār）職に軍隊への支給を任務としていたワ

ズィール (wazīr) 職、ウスターダール (ustādār) 職を兼務させるとともに、さらにエジプトの地方官の長である kāshif al-kushshāf 職をも兼務させてエジプト各地の収入の多くを直接この職の管理下に置き、軍隊への支給任務に関する権限を集中させた。また、エジプト各地からの収益の確保をより確かなものとするため、マムルークを従来のウルバーンのシャイフたちに代えて地方に任命し、各地から徴税を行なうことや、地方監督官 (kāshif) たちに一定の徴収額を割り当て、その領域内にあるイクター地への課税も行なうようになった。このような政策は、言わば軍隊の基盤としての効力を失ったイクター制からの脱却を押し進めるものであり、このような改革によって国家体制の立て直しが図られたのである⁽¹⁴⁾。

このような中央政府による国家体制の変革は、エジプトに限られたものではなく、シリア地方に対する地方統治の掌握方法にも変化を与えた。以下、この時代の中央政府の財政政策に基づくシリアとの関係についてダマスクスを中心とした分析を行う。

2. スルタンの財政政策とシリアからの徴税

マムルーク朝期、シリアの各州は、スルタンによって直接任命された州総督 (nā'ib al-saltāna) を頂点とした、エジプトの中央政府と同様の統治機構をもった州政府によって統治されていた。カルカシャンディー al-Qalqashandi の百科全書 *Ṣubḥ* によれば、シリアの各州において財政を担当していた官吏は、行政職の長である wazīr および nāzīr al-mamlaka と、彼に協力して徴税業務を管轄する武官職の shādd al-dawāwin であった⁽¹⁵⁾。彼等によって徴収・管理された州の税収は、州政府の用途に用いられる他、カイロに送られていたはずであるが、それがどのように分けられていたのかは定かでない。しかし、例えば788/1386年に逮捕されたダマスクス総督は、従来エジプトに財貨 (amwāl) を送っていたが、それが少なくなると述べられているように⁽¹⁶⁾、税収入の一部が従来よりカイロに輸送されていたことは明らかである。

しかしこの時代のダマスクスの年代記には、これらの財務官吏が

任命されている例は見い出せず、代わりに州総督は、自身のウスターダール (ustādār) とした私的な党派 (jamā'a) の官吏を用いて都市からの徴税を行っていた⁽¹⁷⁾。このような制度的な変化が生じた理由については後で述べるとして、まずは中央政府がどのようにしてシリアの州からの税収を確保していたのかという問題を検討する。その際、この時代の史料に頻繁に見られる、売官による収入、官吏からの財産没収、ワクフや私有地への課税といった、中央政府の命令によって実行されていた臨時税の徴収から検討することとする。

中央政府は、軍事遠征などの特別な出費がある場合、しばしばカイロのワクフ・私有地への大々的な課税やエジプトの地方監督官 (kāshif) やウルバーンの長などに一定の徴収額を割り当てる政策をとったが、その際シリアの各州もその対象とされた。例えば896年5月/1491年3月にスルタンの遠征費用の負担としてダマスキスの商人たちへの課税が行われたが、それはカイロおよびアレクサンドリアやダミエッタにおいても同時に行われている⁽¹⁸⁾。しかしこのようにシリアから直接徴税が行われた事例として、エジプトの史料に見られる例は、一部のかなり大規模な場合に限られていた。この時代のダマスキスの年代記によると、それ以外にも様々な機会にカイロから課税に関する勅令が届けられていたことが確認できる。その際にスルタンの使者として派遣され、大きな役割を果たしていたのがハーッサキーヤ (khāṣṣakiya, sing. khāṣṣaki) である。

ハーッサキーヤとは、スルタンのマムルーク軍団の中でも最も寵愛されていた、言わばスルタンの親衛隊にあたる集団であった⁽¹⁹⁾。この時代、こうしたハーッサキーヤの一員が、スルタンの特務を帯びてダマスキスへと派遣されてくる例が頻繁に見られたが、その派遣理由としては、官吏からの財産没収、遺産の差し押さえ、都市民衆からの徴税、ワクフからの徴税といった、この時代に頻繁に見られる臨時税の徴収を中心とした、財政関係の任務が主であった (71例中32例)⁽²⁰⁾。州総督は、遠征時の歩兵徴集の際や殺人が起こった際の罰金として都市の街区に課税を行うことはあったが⁽²¹⁾、この

ような臨時税を任意に課す権限はなく、それらは中央政府がハーッサーキヤを派遣して直接徴収する、中央の財源の一つであったのである。

このような理由で派遣されてきたハーッサーキヤは、単にスルタンの勅令を運び、総督に税の徴収を促すという伝令としての役目を負っていたのではない。彼等はしばしば、現地で総督や州政府の吏員たちとは無関係に、自身でその業務を遂行していたのである。例えば892年9月/1487年8月にダマスクスへ派遣されてきたハーッサーキヤの一人は、ガザ、エルサレム、サファド、ハマー、トリポリ、アレppoといったシリア諸州の住民に対する課税を任務としており、彼が次にダマスクス北方の州へ向かった際、「彼（ハーッサーキヤ）は言葉に言い表せないような不正（*ẓulm*）を行い、たとえ貧しくあっても各モスク（*masjid*）から金を奪い、各々の墓（*turba*）、各々のマドラサにも同様にした。彼はそれらの（施設の）ことや公益（*maṣāliḥ*）を考えず、彼自身の利益とスルタンの利益（のみ）を考えた」と述べられ⁽²²⁾、その徴税への自身の関与が窺える。また、895年6月/1490年5月にダマスクスの *Maydān al-Ḥaṣā* 街区で、ハーッサーキヤによる徴税への抗議行動が起こった際にも、徴税責任者であるハーッサーキヤ自身が交渉の表舞台にたち、総督代理のハージブ（*hājib*）などの州政府の官吏は批判の矢面に立たされていないことも⁽²³⁾、ハーッサーキヤが州政府とは無関係に徴税業務を行っていたことの証拠となろう。

しかし、こうした任務をハーッサーキヤが単独で遂行していたとは考え難く、当然それを補佐するための官吏が必要とされた。その役割を担っていたのが、以下で述べるように、この時代に財政面で一定の役割を果たすようになった城塞とその官吏たちであった。

3. 城塞の財政的役割

マムルーク朝の統治制度では、ダマスクスをはじめとするシリアの各州都においては、州行政を統括する州総督とは別に、都市の一角を占めた城塞（*qal'a*）に城塞総督（*nā'ib al-qal'a*）がスルタン

によって直接任命されていた⁽²⁴⁾。州総督が居住し、政務を行っていた場所は Dār al-Sa'āda、もしくは Dār al-Niyāba と呼ばれ、ダマスカスにおいては城塞の外、南の目抜き通りを隔てた向かいにあり⁽²⁵⁾、都市の防衛の際の拠点であった城塞とは分けられていた。このような城塞は、基本的に州総督および州政府の権威は及ばない機関であり、その名のとおり「スルタンの城塞」と呼ばれることもあったのである⁽²⁶⁾。一方で、城塞総督がスルタンから直接に任命され、配下に駐屯兵を握り、ダマスカス総督の権限が及ばないというその性格上、城塞は州総督の行動に目を光らせ、そのスルタンへの従属を確かなものとする監視者としての役割をも担い、時にはスルタンの密命を受けて州総督を逮捕するなど、スルタンの意思を実力をもって総督に強いるほどの強制力を持っていた。いわば城塞は、シリアにおけるスルタン権力の出先機関でもあったのである⁽²⁷⁾。

このような城塞が、この時代シリアにおいてハーッサキーヤと同様に、臨時税による中央政府の収入の確保に大きな役割を果たすようになった。まず最初に、臨時税の中でも最も頻繁に見られた、官吏任免時の金銭の取り立てについて考察する。この時代、売官制度の発展によって、任命時に一定の金銭の支払いを行うことがほとんど全ての官吏の義務となり、またその支払金の遅延やその他の解任時に国家から強制的に取り立てられる財産没収も頻繁に行われるようになった⁽²⁸⁾。シリアの各州の官吏を任免する権限は、特に高位の官職についてはそのほとんどが中央政府に属するものであったことから、売官や財産没収の収入は中央政府に直接納まるものであった。すなわちこうした手法は、シリアのアミールやウラマーの任免によって彼等の有するシリアの財貨をエジプトにもたらす役割を果たしていたといえよう。

さて、任命時の支払いの場合、被任命者が直接カイロに赴いた上で任命を受け、その際に支払いを行っている例が、特に文官職の場合頻繁に見られたが⁽²⁹⁾、解任やその他の理由による財産没収は、シリアにおいてそのほとんどが城塞に投獄されて行われていた⁽³⁰⁾。このような財産没収は、城塞がスルタンの命令を受けた上で行って

いたことは明らかであり、実際に財産没収を命じる勅令が、直接城塞にあてて届けられている例も見られる。916年12月/1511年3月、当時のダマスクスのハナフィー派大カーディーの財産没収を命じる勅令が、城塞総督の副官にあたるナキーブ (naqib al-qal'a) のもとに届き、実行されている⁽³¹⁾。また、売官の支払い金を分割で支払うことを約束していた官吏が、その遅延のために城塞に拘束され、取り立てられる例も見られることから⁽³²⁾、シリアにおいて任命が行われた場合の取り立ても、同様に城塞が管轄していたと思われる。このように、売官・財産没収の収入を確保するために、地方において対象者から強制的に金を取り上げ、蓄えるための機関として、州政府から独立し中央政府と直接結び付いていた城塞がその役割を果たしていたのであった。また城塞は同様に、死亡した官吏の遺産の差し押さえにも関与していた。892/1487年にダマスクス総督キジュマース Qijmās が死去した際には総督の金庫の書記 (kātib khizāna al-nā'ib) と総督のディーワーン (diwān al-nā'ib) の官吏が城塞に拘束されており⁽³³⁾、897年1月/1491年9月には、当時ダマスクスの軍務庁に勤めていた人物の遺産に、城塞総督がワキール (wakil ai-sultān) とともに封印を施している (khatama)⁽³⁴⁾。

このように城塞が財産没収や遺産の差し押さえを担う例は、末期の時代に特有なものではなく、それ以前からも見られた⁽³⁵⁾。しかし時代が下るに従ってこのような臨時税徴収が増加すると、それに伴って城塞の財政的役割も従来よりもはるかに増加していった。前述したようにハーツサキーヤの一員が財政上の任務を負って頻繁に派遣されてくるようになると、城塞はその業務を補佐するようになった。例えばダマスクスの官吏からの財産没収のために特別にハーツサキーヤが派遣されてきた場合も、その実行は城塞で行われており⁽³⁶⁾、910年1月/1504年6月に、ダマスクスのワクフ財の没収の任務を受け、スルタンから派遣されて来ていたハーツサキーヤの一員が突然死亡した時には、城塞総督が代わって彼の残りの業務を引き継いでいる⁽³⁷⁾。このような例も、城塞がハーツサキーヤの徴税任務を現地において補佐し、実行する役割を担うとともに、それによっ

て獲得した収入を保管する役目も負っていたことの証明となろう。こうして徴収された、州政府の管轄に属さない「スルタンの金 (māl al-sultān)」は、城塞内の金庫 (ṣundūq) に蓄えられ、スルタンの用途や巡礼資金に使用されたり、折を見て城塞の兵の手によってカイロへ輸送されたりしていたのである⁽³⁸⁾。例えば902年1月/1496年9月にはエジプトの軍隊の出征手当 (nafaqa) の不足を補うため、ダマスクスの城塞からスルタンのもとへ十万ディーナールが百人の騎兵 (fāris) と城塞総督によって輸送されている⁽³⁹⁾。

さて、元来軍事的機関であった城塞がこのような財政業務を担うには、*Ṣubḥ* で城塞の官として規定されている城塞総督などの武官職だけでは不可能であろう。この時代、城塞に関連した文官職が多数存在していたことが、史料によって確認できる。城塞の財務行政の長であったのが、この時代史料中に散見する *nāẓir al-qal'a* であったと思われる⁽⁴⁰⁾。「*nāẓir*」とはマムルーク朝期において、高位の文官職、特に各ディーワーンの長の名称であったが⁽⁴¹⁾、この *nāẓir al-qal'a* については *Ṣubḥ* に規定がない。この官職が史料中に最初に確認できるのは、管見の限り、847/1443-4年にアレppoとダマスクスで各々他の文官に兼任されている例が最初である⁽⁴²⁾。これはすなわち、9/15世紀中頃から売官や官吏からの財産没収が頻繁に行われるようになったことから、城塞の財政的役割が増加し、それによってこの職が新設されたか、従来はマイナーな職であったものが重要性を増し、史料中に記述される機会が多くなったものと思われる。

城塞に関係する行政官として史料中に確認できるのは、それ以外にも、「城塞のディーワーン (*diwān al-qal'a*)」、「城塞の公証人 (*shāhid al-qal'a*)」、「城塞の官僚 (*mubāshir al-qal'a*)」等があり⁽⁴³⁾、これらの官が *nāẓir al-qal'a* を長として州政府と別系統の機関である城塞にディーワーンを形成し、独自に運営を行っていたことは明らかであろう。こうした城塞の行政官と城塞総督や駐屯兵等の武官は総称して「城塞の衆」「城塞の人々」(*jama'a al-qal'a, ahl al-qal'a, al-qal'a'iya*) と呼ばれ、一つの集団としてとらえられて

いたのであった⁽⁴⁴⁾。

ところで、末期の時代に城塞が管轄していた税収は、この時代特有の臨時税だけではなくたようである。この時代、ユダヤ教徒・キリスト教徒等のズインミーから徴収される、イスラーム法でも規定された国家の正規の税である人頭税 (jizya, jawāli) を監督していた nāzīr al-jawāli の職が、前述した城塞の文官の長である nāzīr al-qal'a の下に置かれていた⁽⁴⁵⁾。シリアで徴収された人頭税は、従来より直接中央政府の収入となっていた形跡があるが⁽⁴⁶⁾、この時代、その税収はダマスカスにおいて、直接城塞が管轄していたのである。また、国庫収入の売却や国家に属する土地・家などの購入を管轄していたワキール (wakil al-sultān, wakil bayt al-māl) 職が nāzīr al-qal'a によって兼任されることも多かった⁽⁴⁷⁾。これらの事例はすなわち、この時代にスルタンが城塞に直接独自の財源を割り当て、自身の収入を確保することを図ったことにより、nāzīr al-qal'a を頂点とした城塞のディーワーンがダマスカスにおいて中央政府に属する金の多くの部分を管轄していたことを意味するのではないだろうか。前述したように従来ダマスカス州政府の財政担当官がこの時代の史料には現われないことは、中央政府が城塞、州総督が自身の党派を用いて各々独自の収入確保に努めた結果、その重要性が失われたためではないかと思われる。また、この時代に「スルタンのマムルーク」や「一族 (qarib)」と述べられている城塞総督が多いことも⁽⁴⁸⁾、城塞の重要性の増加によって、スルタンがシリアのアミールではなく、自身との結び付きが強い人物を城塞総督として、直接中央の収入をコントロールすることを試みた結果であるといえよう。

II. シリアの支配層の変容と中央政府の政策

1. シリアのマムルーク層の動向

前章で明らかにしたように、この時代、シリアの地方行政において城塞の果たす役割が拡大していたが、その一方で、従来州政府による支配の中核を担っていた、シリアのマムルーク層にも様々な変

化が生じていたことが確認できる。

この時代のシリアのマムルーク層全般について第一に言えることは、彼等のマムルーク朝全体の中における相対的な地位が明白に低下していたという事実である。*Badā'i*、*Mufākaha* をもとに、スルタン・カーイトバーイの即位以降のシリアの各州の総督就任者の経歴を検討し、エジプトのアミールから直接任命された場合および退任後にエジプトの官職へと異動になった場合の各々の地位についてまとめたのが表1である。

この表によれば、ダマスカス・アレppoの二州の総督の場合は、就任前後のエジプトにおける地位はいずれも百人長に限定されているが、それ以下の総督職については、そのような例はほとんど見られず、その地位はエジプトの四十人長以下のものであることは明らかである。*Ṣubḥ* によれば、シリアの各州総督は皆百人長から任命され、総督以外の州政府の官職や領域内の地方都市の総督にも、百人長が任命される場合もあったとされているが、この表からも明らかのように、この時代には、シリアのマムルークの中でエジプトの百人長に匹敵する地位にあったのはダマスカス・アレppoの二つの州総督のみとなっていたのである⁽⁴⁹⁾。そのことは必然的に、総督

表1：シリアの州総督就任前後のエジプトにおけるアミール位^{*1}

州名	就任前の地位				転任後の地位			
	述べ数	百人長	四十人長以下	不明	述べ数	百人長	四十人長以下	不明
ダマスカス	6	6	0	—	3	3	0	—
アレppo	5	5	0	—	2	2	0	—
トリポリ	3	0	3	—	2	0	0	2 ^{**}
ハマー	3	1(2) ^{*3}	0	—	4	1	1	2 ^{**}
サファド	3	(1)	2	—	0	—	—	—
ガザ	5	(1)	4 ^{*5}	—	0	—	—	—

- *1：前後がエジプトのアミールであったことが確認できる者のみを対象とする。
- *2：これ以外に、遠征中に捕虜となった後、エジプトの四十人長に任じられている例もある。
- *3：括弧内は、失脚・左遷的な人事であることが明確なもの。以下同。
- *4：内、1人はエジプトに呼び戻された後、しばらくして同職に再任となった。
- *5：いずれも十人長の地位にあった。

の部下である各州のアミールの地位の低下をも伴うものであった。シリアの各州においてもエジプトと同様に百人長・四十人長・十人長とランク分けされたアミールたちが存在しており、従来より、シリアのアミールはエジプトの同ランクのアミールと比較すると、そのイクター収入は州総督を除いて後者の三分の二程の値であることや、シリアのアミールに任じられることは左遷というイメージがあったことなど、ある程度の隔たりはあったものの、地位としては同格であった⁽⁵⁰⁾。しかしこの時代には、エジプトの十人長がダマスクスの百人長に任じられる場合ですら、スルタンの不興による左遷の人事とされているように⁽⁵¹⁾、シリアのアミールの地位はエジプトにおける同ランクのものとは比較にならないほど低いものとなっており、その差は従来以上に顕著なものとなっていたのである。この時代のシリアの官職のキャリアパターンから、末期のエジプトとシリアの武官職のランクをおおまかに対応させたのが、表2である⁽⁵²⁾。

このようなシリアの官職の地位の低下は、9/15世紀中頃から漸次的に進行していった観があるが、それが定着したのが870/1466年にシリアで第三番目の地位にあったトリポリ総督職にエジプトの四十人長が初めて任命された後であった。870年11月/1466年7月、エジプトの四十人長カーニバーイ Qānibāy al-Ḥasani al-Mu'ayyadī が、四十人長として初めてトリポリ総督に任命された。このことについてイブン・タグリービルディー Ibn Taghribirdī は、従来この職にはエジプトの百人長の高官たちが任じられていたことを引き合いに出し、この人事を「慣習から外れたことの一つ」として非難している⁽⁵³⁾。しかしこの後、ダマスクス・アレppoの両総督以外のシリアの官職にエジプトの百人長の地位にある人物が就任することは、権力闘争その他の結果としての左遷や失脚による例外的な人事となり⁽⁵⁴⁾、その例もわずかに見られるに過ぎなくなったのである。921/1515年、エルサレム総督 Yūsuf がサファド総督に任命された際、イブン・イヤース Ibn Iyās は「かつてサファド総督職の慣習では百人長以外がその職に任じられることはなかった」と述べ、エジプトの百人長が任じられた最後の例として、896/1491年に同職に

任じられたアミール Azdamur の名を挙げているが⁽⁵⁵⁾、彼の場合もスルタンの不興による左遷であり⁽⁵⁶⁾、百人長以外の人物が同職に任じられることはすでに彼以前から主流となっていたのである。

このようなエジプトとシリアのマムルーク層の地位格差の拡大という現象は、その重要性の低下と表裏一体であるといえるが、それはどのような要因に基づくものであったのだろうか。その要因の一つとしては、前章で明らかにしたような、城塞というスルタンと直接結び付いた機関が果たす役割が拡大したため、州政府の相対的な重要性が低下したことが挙げられよう。しかし根本的には、この時代の財政危機と国家の政策が大きな要因を占めていたと思われる。

すでに述べたように、この時代の財政の危機的状況の中で、エジプトの中央政府は、イクター収入の減少したマムルークに俸給支払を行うことによってその不足を補っていた。しかし、同様の俸給支払いがシリアにおいて恒常的に行われていた形跡は見られない。一方、マムルークはアミール位や官職に就任する際、同時にその官職と付随したイクターが与えられていたが、そのイクターの規模はそ

表2：エジプト・シリア官職ランク対応表

	エジプト	シリア
百人長	atābak al-'asākir	
	amīr silāḥ amīr majlis amīr ākhūr	ダマスカス総督
	ra's nawba al-nuwab dawādār ḥājib al-ḥujjāb	アレppo総督
	官職なし	
四十人長	官職有	トリポリ総督 ハマー総督
	官職なし	サファド総督 ダマスカス・アレppo州武官
十人長	官職有	ガザ総督
	官職なし	各地方都市・要塞の総督

の官職のランクと不可分なものであったことから⁽⁵⁷⁾、この時代のシリアのmamuluk層のランクの低下は、そのまま彼等が授与されるイクターの収入がその地位に応じた小規模のものとなったことと表裏一体であったといえよう。すなわち、この時代のエジプトとシリアのmamuluk層の差異の拡大は、先に述べたような農業収入の減退とワクフの増加が進むにつれ、従来のような高位のアミールたちに、その地位に応じた収入を見込めるだけの農村をイクターとして与えることが困難になったことと、シリアのmamuluk層がエジプトのそれと異なり、その経済的な弱体化を補うための手だてを何ら講じられていなかったことに起因するものであると思われる。すなわち、中央への財貨の効率的な集中とそれによる軍隊維持といふこの時代の国家政策が、中央政府の体制維持を優先的に図るものであったため、重要性の劣るシリアにおいてはこうした政策の恩恵がなかったということがこのような現象の大きな要因であった。

一方で、このようなシリアのmamuluk層の経済的弱体化は、この時代に州政府のアミールの行政における役割が低下したことや、彼等の軍事的役割の低下とも無関係ではないと思われる。三浦徹がすでに明らかにしたように、この時代のダマスカスにおいては、ハージブ等の州政府の武官たちの果たす役割が後退し、代わりにダマスカス総督は、自身のmamulukを中核とした私的な党派を用いて行政を遂行していた⁽⁵⁸⁾。また、軍事的にも遠征時に臨時的に徴集される歩兵の重要性が増加した⁽⁵⁹⁾。これらのことは、総督を除いたダマスカスのmamuluk層がその影響力を失い、彼等を核とした既成の州政府機構がうまく機能しなくなっていたことの現われであるといえよう。このように、支配の中核であったmamuluk層の在り方についても、国家の政策に基づく地域差を伴っていたのである。

2. シリアのウラマー層と中央政府の関係

一方、mamulukと並んで国家行政の担い手であったウラマー層に目を向けると、この時代のシリアにおいては、mamuluk層の弱体化と反比例して、複数の国家の官職を一手に握り⁽⁶⁰⁾、地域社会

において幅広い影響力を有した一部の有力ウラマー層が台頭していた⁽⁶¹⁾。こうした現象も前述したようなシリアのマムルーク層の影響力の低下と無関係なものではないと思われるが、それについての分析はここでは行わない。ここで指摘しておきたいのは、この時代にこのような地方の有力ウラマーと中央政府との直接的な結び付きが、従来と比べより強固なものとなっていたことである。

この時代、シリアの有力ウラマーたちは頻繁にカイロを訪れ、時には長期にわたって滞在することも見られた。ダマスカスの官職保有者であるにもかかわらずカイロに居住していた最初の人物が、ダマスカスのシャーフィイー派大カーディー、サーブーニー ‘Alā’ al-Din b. al-Ṣābūnī である。彼は870/1465年から大カーディー職とともに軍務庁長官 (nāzir al-jaysh) 職を兼務したが、872/1468年に解任されるまで、ダマスカスには彼の代理たち (nuwwāb) を置き、自身はカイロに留まっていた。このことをイブン・タグリービルディーは「これと同様なことは全く知られていない」と述べている⁽⁶²⁾。しかし彼の後、シリアの有力ウラマーが同様にカイロに長期滞在をしている例はしばしば見られるようになった⁽⁶³⁾。例えばダマスカスのシャーフィイー派大カーディーを約二十五年間勤めたシハーブ・アッディーン・イブン・アルフルフル Shihāb al-Din Aḥmad b. al-Furfūr (856-911/1452-1505)⁽⁶⁴⁾は、頻繁にダマスカスとカイロの間を往復し、時には一年以上カイロに滞在した⁽⁶⁵⁾。しかも晩年の908年2月/1502年8月からは911年6月/1505年11月に死去するまでカイロに滞在し、エジプトとダマスカスの大カーディーを兼務して、ダマスカスでの職務は彼の代理たちに任せている⁽⁶⁶⁾。

このようにシリアの有力ウラマーと中央政府との直接的な結び付きが緊密化していた事実は、国家と地方社会との関係を考える上で一つの大きな変化であるといえよう。このような例は、先に述べたようにエジプトの中央政府がシリアの官職任免権を有していたことから、一部の有力者が国家の官職を獲得するために積極的な運動を試みたことに起因するものであったが⁽⁶⁷⁾、同時に中央政府の側も、彼等から売官や財産没収を通じて財貨を獲得することを意図して頻

繁な任免を行っていた。この時代、このような有力ウラマーはワクフに関する権益を多数握り、私財を拡張して経済力をも増大させており⁽⁶⁸⁾、彼等からの売官・財産没収を通じた収入はしばしば数万ディーナールという、マムルーク・アミールのそれに匹敵する金額に及んだことから⁽⁶⁹⁾、このような手段による財貨獲得が財政上重要であったことは明らかであろう。

しかし、中央政府側が任免権の行使によって地方有力ウラマーとの結び付きを強めたことは、単なる財政上の必要性にとどまるものではない。それ以上に、従来の国家体制が弛緩していく中で、この時代シリア地方行政の掌握のためには、地域的な影響力を拡大した彼等との結び付きが不可欠となり、そのコントロールに腐心していたということを意味するのではないだろうか。すなわち、従来のシリア統治体制が解体に向かう中で、中央政府が城塞の強化や地方有力ウラマーとの連携など、シリア統治に対する直接的な干渉を強めていった過程としてとらえられるのではないか。このことについてはいまだ確証は得ないが、このような現象は、有力ウラマーがカイロに滞在していても任地での影響力を保ち得たという彼等の地方行政の掌握力の強さを証明するものであると同時に、彼等の中央政界における影響力をも示すものであるといえよう。

おわりに

以上のように、マムルーク朝政府は、9/15世紀後半以降の末期の時代において、恒常的な財政危機とイクターに依存していたマムルークの弱体化という危機的状況のなかで、国家体制の維持のために様々な改革を断行した。城塞の財政上の役割の強化とそれを通じた中央政府による直接的な財務の掌握といった、この時代のシリアの統治体制の変化も、このような政策の一環としてとらえられる。すなわち、エジプト・シリアの従来の地方行政システムとは異なった形で国内の財貨をカイロの中央政府のもとに効率的に集中させ、イクター収入の減少した軍隊を俸給体制を強化することによって国家体制を維持するという政策であった。

この時代エジプトにおいては、イクターを授与されることなく、俸給のみを支給された百人長も生まれた⁽⁷⁰⁾。また918/1512年には、スルタンに次ぐ地位にあったエジプトの総司令 (atābak al-‘asākir) から2万ディーナール分のイクター地が削減されている⁽⁷¹⁾。これらの例は、一兵卒だけでなく有力百人長たちもこのような政策の対象とされていたことの現われであるといえよう。スルタン・ガウリーの時代に、イクター地の減少にもかかわらず、エジプトに27人というマムルーク朝期を通じて最多の百人長数を確保し得たのは⁽⁷²⁾、このような背景によるものであった。一方、この時代に創設された「第五軍 (al-ṭabaqa al-khāmisa)」と呼ばれる銃歩兵軍団の兵士は、イクターを授与されることなく完全に俸給に依存しており、軍隊の俸給体制への転換が進展した最も端的な例であるといえよう⁽⁷³⁾。

一方でシリアにおいては、従来の統治機構の変化にとどまるものではなく、マムルーク層の弱体化、地方有力ウラマーの台頭と、国家体制の弛緩がより顕著なものとなっていった。しかしそれは、単純に国家の弱体化として一括すべきものではなく、前述したような国家政策が中央政府の体制維持を優先的に図るものであったことから生じた、中央と地方との地域差を考慮に入れるべき現象であった。さらに中央政府は、シリアのマムルーク層の立て直しを図るよりも、地域的影響力を増した地方有力ウラマーとの直接的な結び付きを通じて支配体制の維持を試みるという、シリア統治の方針の大幅な変化をもたらしたと思われるが、それについてはなお一層の考察が必要であろう。

以上、この時代のシリア統治の在り方について、主に中央政府による地方政策という面から考察した。なお、この時代のシリアにおいて顕著となった有力ウラマーの台頭とマムルークの影響力の低下という現象は、従来の社会秩序を大きく逸脱するものであると言えるが、本稿では表面的な考察にとどまっている。この件については農村支配の問題など、それがシリア社会に与えた様々な影響についてさらなる検討を加えるべき必要が多く残っているが、それについてはここで触れる余裕はなく、機会を改めて検討したい。

註

- (1) cf. I. M. Lapidus, *Muslim Cities in the Later Middle Ages*, Cambridge, 1967, pp.38-43., P. M. Holt, *The Age of the Crusades: The Near East from the Eleventh Century to 1517*, London and New York, 1986, pp.192-202.
- (2) Carl F. Petry, "The Military Innovations of Sultan Qānṣūh al-Ghawri: Reforms or Expedients?", *al-Qanṭara: Revista de Estudios Áabes*, 14-2, 1993., id. *Twilight of Majesty: The Reigns of the Mamlūk Sultans al-Ashraf Qāyṭbāy and Qānṣūh al-Ghawri in Egypt*, Seattle and London, 1993., id. *Protectors or Praetorians?: The Last Mamlūk Sultans and Egypt's Waning as a Great Power*, Albany, 1994.
- (3) cf. *Zubda*, pp.131-5., W. Popper, *Egypt and Syria under the Circassian Sultans 1382-1468 A.D. Systematic Notes to Ibn Taghri Birdi's Chronicle of Egypt*, 2 vols, Berkeley and Los Angeles, 1955-7. I, p. 103., N. A. Ziadeh, *Urban Life in Syria under the Early Mamlūks*, Beirut, 1953., repr. Westport, 1970, pp.11-18.
- (4) 例えば Akram Ḥasan al-'Ulabi, *Dimashq bayna 'aṣr al-mamālik wal-'uḥmāniyyina 906-922 A.H./1500-1520 A.D.*, Dimashq, 1982., Taha Thalji Tarawneh, "The Province of Damascus during the Second Mamlūk Period (784/1382-922/1516)", Ph. D. diss., Indiana University, 1987の二つが挙げられるが、いずれも具体的事例を豊富に含んでいるものの、末期という時代の評価や研究方法については際立った特徴はない。
- (5) 三浦徹「マムルーク朝末期の都市社会：ダマスクスを中心に」【史学雑誌】98-1. 1988.
- (6) cf. Lapidus, *op. cit.*, pp. 25-31., Sato Tsugitaka, *State and Rural Society in Medieval Islam :Sultans, Muqta's and Fellahun*, Leiden, 1997, pp.236-9.

- (7) cf. A. L. Udovitch, “England to Egypt, 1350-1500: Long-term Trends and Long-distance Trade”, *Studies in the Economic History of the Middle East*, M. A. Cook (ed.), London, 1970, pp. 115-128. なお、Dols によれば、15世紀初めには、エジプトの人口は748/1348年のペスト大流行以前の2/3以下に減少し、シリアにおいてもペストによって人口の約1/3が失われた。M. W. Dols, *The Black Death in the Middle East*, Princeton, 1977, pp.193-202, 218-220.
- (8) 佐藤次高はこのような体制を「マムルーク体制 (Mamlūk regime)」と呼んでおり、本稿においてもこの定義に従うこととする。佐藤次高【中世イスラム国家とアラブ社会：イクター制の研究】山川出版社, 1986, 232頁。Sato, *State and Rural Society in Medieval Islam*, p. 146. また、I. M. Lapidus も、マムルークの権力の源泉は土地保有によって生じる富を都市に還元する力にあったことを指摘している。Lapidus, *op. cit.*, p.188.
- (9) Muḥammad Muḥammad Amin, *al-Awqāf wal-Ḥayāt al-Ijtimā'īya fi Miṣr 648-923 A.H./1250-1517 A.D.*, al-Qāhira, 1980, pp.299-303. なお、それによれば、10/16世紀初めにはエジプトの土地の10/24がワクフとなっていた。
- (10) スルタン・バルクークによる Diwān al-Mufrad の創設と、その役割については、*Ṣubḥ*, III, p. 453., *Zubda*, p.107., *Khiṭāṭ*, II, pp.223-4., B. Martel-Thoumian, *Les civils et l'administration dans l'État militaire mamlūk (IX^e/XV^e siècle)*, Damascus, 1992, p.53を参照。なお、これにより従来のイクターとは別の恒常的な収入手段がマムルークに与えられるようになり、その後この俸給支払を円滑に行うことが国家の主要な関心事となったという意味で、マムルーク朝国家体制の一つの転換点となったといえよう。軍隊への俸給支払については、D. Ayalon, “The System of Payment in Mamlūk Military Society”, *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 1, 1958を参照。
- (11) 三浦, 前掲論文, 2-3頁。

- (12) *Hawādith*, III, p. 689., *Inbā'*, pp.33-4.
- (13) cf. Petry, *Protectors or Praetorians?*, pp.29-61. なお、カーイトバーイの治世における16回の対外遠征による軍隊への *nafaqa* の総額は、計7,065,000ディーナールに達したという。*Badā'i'*, III, p. 325., Ayalon, *op. cit.*, pp. 273-4.
- (14) カーイトバーイ期のこのような一連の財政改革については、ここで詳しく述べる余裕はないが、とりあえずは、*Badā'i'*, III, pp.22-3, 28-9, 331-2., *Inbā'*, pp. 23-4, 33-41, 58., 三浦, 前掲論文, 2頁を参照。なお Petry は、スルタン・カーイトバーイとガウリーの財政政策の一つとして、スルタン個人による大量のワクフの設定を挙げている。Petry, *Protectors or Praetorians?*, pp.196-210.
- (15) *Ṣubḥ*, IV, pp.186, 188-9, 218, 219., Popper, *op. cit.*, pp.106, 107.
- (16) *Durra*, II, pp.1-2.
- (17) 三浦, 前掲論文, 12-19頁。
- (18) *Badā'i'*, III, p. 281. 同様の例として、*Badā'i'*, III, p.280., IV, p.15.
- (19) D. Ayalon, "Studies on the Structure of the Mamluk Army 1", *BSOAS*, 15, 1953, pp.213-216.
- (20) *Buṣrawī*, *I'lām*, *Mufākaha* の集計による。
- (21) 三浦, 前掲論文, 12-19頁。
- (22) *Mufākaha*, I, p.78.
- (23) *Mufākaha*, I, pp.124-125.
- (24) *Ṣubḥ*, IV, pp.184-5.
- (25) ダマスクスの *Dār al-Sa'āda* については W. M. Brinner, "Dar al-Sa'ada and Dar al-'Adl in Mamluk Damascus", *Studies in Memory of Gaston Wiet*, M. Rosen-Ayalon (ed.), Jerusalem, 1977を参照。
- (26) *al-qal'a al-sultāniya: Bidāya*, XIV, p.260., *qal'a al-sultān: Bidāya*, XIV, p.284.
- (27) 城塞総督による州総督逮捕の例としては、*Bidāya*, XIII, p.288.,

Shuhba, I, pp.27, 330. *I'lām*, pp.80-83.など。その他の城塞による州総督の行動への干渉例としては、*Buṣrawī*, p.161., *Mufākaha*, I, pp.163, 298-9.

(28) このような手法は、従来単に「賄賂」という倫理的な腐敗現象として扱われることが多かったが、三浦徹も指摘するように、こうした金銭の支払いはスルタンによって恣意的に課せられるものではなく、全ての官職志願者に要求され、時代が下るにしたがって頻繁に見られるようになった、財政不足をカバーするための政策であった。詳しくは Miura Toru, “Administrative Networks in the Mamlūk Period: Taxation, Legal Execution, and Bribery”, *Islamic Urbanism in Human History: Political Power and Social Networks*, Sato Tsugitaka (ed.), London and New York, 1997を参照。こうした現象はすなわち、「賄賂」というよりもむしろ Martel-Thoumian のように「売官」としてとらえるべきであろう (Martel-Thoumian, *op.cit.*, pp.88-92.)。

(29) シリアのウラマーがカイロで金を支払ってシリアの官職を獲得し、帰還するという例はこの時代頻繁に見られた。例として、*Mufākaha*, I, pp. 36-7, 39., *Badā'i'*, III, pp.119, 309.

(30) *Buṣrawī*, pp.29, 31, 33, 36, 51, 75, 77, 81, 132, 139., *Mufākaha*, I, pp.100, 335, 342, 351.

(31) *Mufākaha*, I, p.351.

(32) *Mufākaha*, I, p.336.

(33) *Buṣrawī*, pp.120-121.

(34) *Buṣrawī*, p.153.

(35) 例として、*Bidāya*, XIII, p.288., XIV, pp.244-5.

(36) *Buṣrawī*, pp.81, 110, 111.

(37) *I'lām*, p.179., *Mufākaha*, I, p.277.

(38) *ṣundūq*: *Mufākaha*, I, p.170., *I'lām*, p.223., 城塞の金の輸送: *Durra*, II, pp.134-5. *Mufākaha*, I, pp.121, 170., *Buṣrawī*, pp.187, 191., スルタンの用途: *I'lām*, pp.222, 223., 巡礼資金: *Ḥawliyyāt*, p.57., *Buṣrawī*, p.201.

- (39) *Buṣrawī*, pp.187, 191., *Mufākaha*, I, p. 170. なお、この時はダマスクスの総督が城塞をも監督し、城塞総督を任命していた特異な状況であったため、城塞の金の輸送を命じた勅令は総督のもとに届けられている。
- (40) *nāzīr al-qal'a*: *Mufākaha*, I, pp.36, 37, 39, 91, 125, 156, 180, 182, 317, 362, 379., II, p.3., *Buṣrawī*, pp.25, 49, 57, 58, 74, 191, 197, 202, 212.
- (41) cf. H. Rabie, *The Financial System of Egypt A.H.564-741/A.D.1169-1341*, London, 1972, pp.154-5., Popper, *op. cit.*, pp.97-99. なお、マムルーク朝の主要なディーワーンとその官吏については、Martel-Thoumian, *op. cit.*, pp.35-58を参照。
- (42) *Iqd*, pp.598, 601.
- (43) *diwān al-qal'a*: *Mufākaha*, I, pp.9, 212., II, p.19., *Buṣrawī*, p.126, 136, 171, 191., *shāhid al-qal'a*, *mubāshir al-qal'a*: *Mufākaha*, II, p.19.
- (44) *jamā'a al-qal'a*: *Mufākaha*, I, p.135., *Buṣrawī*, pp.136, 198, 202., *I'lām*, pp.192, 210., *ahl al-qal'a*: *Mufākaha*, I, p.237., *Buṣrawī*, p.236., *al-qal'a'īya*: *Mufākaha*, I, pp.175, 211, 212., *Buṣrawī*, pp. 161, 197.
- (45) *Mufākaha*, I, p.371. また、実際にその両方の職が兼任される例も頻繁に見られた: *Buṣrawī*, p.74, 141, 191, 197, 202., *Mufākaha*, I, pp.36, 37, 39, 125, 180, 182. またその名の通り “*nāzīr al-jawāli bil-qal'a*”(城塞の *nāzīr al-jawāli*)と述べられる例もある(*Buṣrawī*, p.130.)。
- (46) 例えばスルタン・カーイトバーイは874/1469年にダマスクス・アレppo・トリポリ各州の人頭税を自身で点検し、その担当官を一度に解任している。*Inbā'*, p.149.
- (47) *Buṣrawī*, *I'lām*, *Mufākaha* で確認できる *nāzīr al-qal'a* 職への就任例18の内、実に13例がワキール職を兼務している。なお、*waki bayt al-māl* の職務については、*Subḥ*, IV, p.36.
- (48) *Buṣrawī*, p.235., *Mufākaha*, I, pp.99, 114, 134, 146, 153, 179,

- 206, 261-2., *I'lām*, p.169. このような傾向はアレppoの城塞総督にも見られる。*Badā'i'*, III, p.125., IV, pp.125, 447., *Ḍaw'*, III, p.65.
- (49) *Ṣubḥ*, IV, pp.182, 198, 233, 238, 241.では、各州のアミール数について「総督以外の百人長」の数を問題にしており、州総督が百人長であることは自明なこととされている。また地方都市の総督にも百人長が任命される場合もあった (*Ṣubḥ*, XII, p.6., Popper, *op. cit.*, pp.109-110.). 年代記においても、例えば838/1435年にハマー総督となったエジプトの百人長 Qānibāy al-Ḥamzāwī は、その職を獲得するために5千ディーナールを借金してまでスルタンに支払い、就任しているように (*Hawliyāt*, p.137.)、9/15世紀前半までは基本的にシリアの全ての州総督はエジプトの百人長が任命されている。
- (50) *Ṣubḥ*, IV, p.182-3., Popper, *op. cit.*, pp.103-4., D. Ayalon, "The Muslim City and the Mamluk Military Aristocracy", *Proceedings of the Israel Academy of Sciences and Humanities*, 2, no.14, 1968, pp.328-329. なお *Ṣubḥ* によれば、スルタン・ナースィル期においてはダマスカスには州総督を除き、10人の百人長がいたとされている。
- (51) *Hawādith*, III, p. 657.
- (52) この時代のシリアのマムルークのキャリアパターンについては、紙数の都合からも、詳細に述べる余裕はないため、以下の諸点を指摘するにとどめる。①シリアの諸州の総督職は、各々一つ下のランクの総督の地位から昇進することが大勢を占めていたが、ガザやサファドなどの低位の総督職から順次昇進してダマスカス・アレppoの総督位まで達するという例はほとんど見られず、到達する地位には各々限界があった。②ガザ総督や州以外の地方都市・辺境要塞の総督・太守は、エジプトの十人長以下の地位にある人物が任じられることが多く見られたものの、州政府の武官職や低位の州総督には、エジプトのアミールが直接赴任してくる割合は少なく、互いに人事の交流のあるシリアの諸官職を歴任する過程で就任することが多かった。このような人物にとって昇進の一つの壁となっていたのが、ハマー総督・トリポリ総督の地位であり、この二者とサファド・ガザ

の総督職や州政府の武官職との間の人事の交流は相方向的なものではなかった。③トリポリ総督はエジプトの四十人長クラスの人物が直接派遣されてくる一方で、シリアの低位の官を歴任してきたアミールが就くキャリアとしては到達点ともいえる地位であった。④ダマスカス・アレppoの二つの総督職は、エジプトの百人長が直接就任するか、エジプトで四十人長程度の地位にあった人物がトリポリ総督として赴任し、その後アレppo、ダマスカスと昇進するというパターンにはほぼ限られていた。⑤カラクはこの時代、既に州としての地位は事実上失われており、ガザ総督や他の地方都市の総督によって兼任されることもしばしば見られた。なお、J. B. Evrard, *Zur Geschichte Aleppos und Nordsyriens im letzten halben Jahrhundert der Mamlukenherrschaft (872-921 A.H.) nach arabischen und italienischen Quellen*, München, 1974には、この時代のアレppo・トリポリ・ハマール総督およびアレppo州政府武官職就任者の一覧表が付してあり、有用であるが、すべての典拠が示されていないことと、任命が命じられはしたものの実際には着任していないようなケースも記載されていることに留意する必要がある。

(53) *Nujūm*, XVI, p.294.

(54) 例えば、900/1495年にハマール総督に任命されたエジプトの百人長 Qānṣūh al-Shāmī は、スルタンに対するクーデター未遂事件に関与し、それが失敗した後アマーン（安全保障）を求めて投降し、ハマール総督へと任じられている。*Badā'i'*, III, p.313.

(55) *Badā'i'*, IV, p.461.

(56) *Badā'i'*, III, p.284.

(57) イクターの規模と官職が密接に結び付いていたことは、同じエジプトの百人長の位にあっても、より高位の官職に任じられた際には新たなイクターに代えられていることから明らかであろう。このような軍人の位や官職に応じたイクター授与の機能化は、スルタン・ナーシルによる検地以後に確立したとされている。佐藤, 前掲書, 242-3頁。Sato, *State and Rural Society in Medieval Islam*, p.156.

- (58) 三浦, 前掲論文, 17-9頁。
- (59) 三浦, 前掲論文, 14-6頁。
- (60) この時代、シリアにおいて書記官や各官庁 (diwān) の長官といった行政職 (arbāb al-wazā'if al-diwāniya) と、カーディーなどの司法・教育関係の宗教職 (arbāb al-wazā'if al-diniya) との両系統にわたって多くの官職を同時に、かつ長期にわたって保持することが多々見られた (cf. Martel-Thoumian, *op. cit.*, pp.59-61, 96-7.)。複数の行政職を兼職する例は特に頻繁に見られ、*Buṣrawi*, *I'lām*、*Mufākaha* によれば、スルタン・カーイトバーイの即位以降のダマスクスの秘書長 (kātib al-sirr) 職就任者 9 人中 5 人、軍務庁長官 (nāẓir al-jaysh) 職就任者 10 人中 7 人が、同時に別の職を兼任している。
- (61) この時代、一部の有力ウラマーは、総督と同様に自身の傘下に多数の吏員をかかえて党派 (jamā'a) を形成し、政治的経済的に多大な影響力を有するようになった。三浦, 前掲論文, 5-11, 32頁。
- (62) *Nujūm*, XVI, p.290., *Ḥawādith*, III, p.629., *Ḍaw'*, V, pp.184-185., *Quḍāt*, p.179.
- (63) *Quḍāt*, pp.178, 227.
- (64) 彼に関しては、*Quḍāt*, pp.180-182., *Ḍaw'*, II, pp.222-3., *Kawākib*, I, pp.141-5., *Shadharāt*, VIII, p.49., 三浦, 前掲論文, 5-8頁参照。エジプト・ダマスクスの大カーディー職兼任については、*Mufākaha*, I, p.280., *Badā'i'*, IV, p.84.。特に三浦論文には、ダマスクスにおけるこの一族の影響力について詳しい。
- (65) *Quḍāt*, p.180., *Mufākaha*, I, pp.151-152.
- (66) *Mufākaha*, I, pp.261, 263, 267, 280, 289, 294.
- (67) このような獵官運動は、史料では sa'ā という動詞が用いられる。例として、*Badā'i'*, III, p.257., *Badā'i'*, IV, pp.91, 267, 338, 460-461, 463, 469., *Mufākaha*, I, pp.31, 296., *Ḥawādith*, III, p.708.
- (68) 例えばこの時代にダマスクスの秘書長職を約二十七年、カーディー職を約二十年に亘って勤め、「ダマスクス州 (al-Shāmiya) のことの大部分は彼の裁量に任されるようになった」と言われた *Quṭb al-*

Dīn Muḥammad al-Khayḍarī (821-894/1418-1489) は、彼の私財 (amwāl) や (ワクフの) 權益 (jihāt)、私有地 (amlāk)、官職 (wazāif) 等の規模が拡大したと述べられている (*Daw'*, IX, p.122.)。その他経済力を強めたウラマーの例として、*Mufākaha*, II, p.115., *Badā'i'*, IV, p.84. なお、この時代の有力ウラマーの収入源については、J. E. Mandaville, "The Muslim Judiciary of Damascus in the Late Mamluk Period", Ph. D. diss., Princeton University, 1969, pp.101-115を参照。

(69) このような売官制度に基づく支払い金は、三浦も指摘しているようにある程度の相場があったが (Miura, "Administrative Networks", pp.46-7.)、シリアの官職に限って見れば、各州総督の場合数万ディーナール、ダマスカスの州政府の武官職の場合はおよそ1万ディーナールであった。一方、文官職の場合、大カーディー職の支払額の相場が約3千ディーナールであるなど、一般的な相場ではこれより低い値であったが、中にはそれ以上の大金を支払う例も見られた。例えば、886年2月には Shihāb al-Dīn al-Furfūr が3万ディーナールの支払いによって、ダマスカスのシャーフィイー派大カーディー、軍務庁長官 (nāẓir al-jaysh)、ワキール、nāẓir al-qal'a の各職を獲得しているし (*Mufākaha*, I, pp.37, 39.)、それ以外にもカーディー職や行政職の獲得に、1万ディーナール以上を費やす例も見られた。例として、*Buṣrawī*, pp.116, 130.

(70) *Badā'i'*, III, p.190., IV, p.100, Petry, *op. cit.*, pp.193-194.

(71) *Badā'i'*, IV, p.283.

(72) *Badā'i'*, IV, pp.358, 434. なお、マムルーク朝最盛期のスルタン・ナスィル期においてはエジプトの百人長は24人であったが、ブルジー期には減少し、定員数が満たされることはほとんどなかった。*Ṣubḥ*, IV, p.14.

(73) D. Ayalon, *Gunpowder and Firearms in the Mamluk Kingdom*, 2nd ed., London and Worcester, 1978, pp.59-83., Petry, "The Military Innovation of Sultan Qānṣūh al-Ghawrī", pp.449-452., *id. Protectors or Praetorians?*, pp.193-4. なお、前述したよ

うにダマスカスにおいてはこのような銃歩兵は遠征時の臨時徴集が主流であったが、このような差も財貨の集中が行われた首都とそのような手段が講じられなかった地方都市という立場の違いが大きく影響したと思われる。